

今日はひどく眼が疲れる。

CADの画面を見てみると、眼の前がキラキラしてくる。隣にいる同僚が話しかけてくる。

「マトリクス見た？」

「最初のやつだけしか見てへん」と答える。

「今、この時、これが現実だと思うか？ ひよつとして俺らもマトリクスに居るのかもしれない」

僕もそんなことを考えている時がある。

「マトリクスじゃない保証ってどこにある？ 証拠ないもんなー」

彼の言う通りだ。この世の中、確かな物は何も無い。目で見えるものでも、それはほんの少しだけ過去の光の反射を見ているだけ。

いつそのことならマトリクスであった方が良いのかもしれない。

今の世の中、汚れきっている。普通に生きて行くことの方が苦しい時がある。

会社の中だけとは言え、一日に八時間以上も自分を押し殺し、言いたいことや物事の本質を

覆させられている。

こんな時間が、入社してからかれこれ十年続いていると、自分自身がダメな人間に思えてくる。いや、明らかにダメになつてきている。

そうだ、きつとマトリクスなのだ。朝見るカレもマトリクスなのだ。僕がこんなにダメなはずがない。

僕は慌てて首の後ろを確かめた。そう、プラグがあるかどうかを。

#9

日曜日の夕方、犬を連れて散歩に出かける。

奈良公園を回り、東大寺の南大門をくぐり、大仏殿の前を通る。

七月にもなると陽が暮れるのは遅く、まだ薄明るいのが観光客はすでにいない。

僕と犬二匹だけが大仏殿正面の石畳に立っていた。遠くから鹿の鳴き声が響いてくるのが薄気味悪さをさらに際立たせる。

そういえば、どこかで聞いたことがある。大仏様の座っている蓮の座の後ろに扉があり、そこをくぐると未来に行けるとか……。

昔、大仏殿が燃えたことがあるそうだ。それは、この危険な扉を封印するために何者かが火

を放ったから。

僕はこの手の話が結構好きだよ。少々作り話臭くてもリアリズムがある。大仏殿が昔、燃えたのは本当だから。

恐竜が絶滅した理由？ それは巨大な隕石が落ち、地球の質量が変わって重力が大きくなることで、巨大な体を支えきれない大型恐竜が滅びる。

それに伴い、食物連鎖に狂いが生じたことで中型や小型の恐竜まで滅んだ。

この説は間違っているらしいが、いかにも本当らしいウンチクじみたところが愛嬌だと思う。こんなことを考えながら暗闇に吸い込まれていく大仏殿の前を通り過ぎる。

そうだ、今度あの扉を探してみよう。

家に帰るとサヤカが夕食を準備している。僕も手伝いながら一緒に作ることが多い。

そして、テレビを見ながら色んなことを話し合っって食事を取る。時期をみてサヤカにも、あの扉の話をしてあげよう。

気が付くともうあと少しで二十三時になるところだ。お風呂に入って、寝るとしよう。

明日は月曜日。大好きな仕事があるから胸が躍るぜ！ という気持ちになつてみたいと思う。

月曜日はつらい。僕の仕事はCADを使った設計の他に実験や解析なども行う。

色々な仮説をたてる。それを検証していくために実験を行い、課題の本質を見極める。

そしてその対策をとるために種々の装置設計を行う。

こんなことを繰り返していると物事の本質を見極めて行くことが非常に重要であることに気付く。

会社の連中は、皆優秀である。システムティックに物事を考えて行くき本質を見極める。

それならば何故こんな会社で働いていることに疑問を持たないのだろうか？

働くことの本質とは？ 家族や自分の幸せのためでは？

どうやら僕は気付いてしまったらしい。気付いた以上、あの扉を探して開けてみるしかないようだ。

きつとあの扉の向こうには、生きることの本質となる何かがあるに違いない。朝見るカレもあの扉を開けたんだ。

「夏岡さん。三番に電話ですー。夏岡さーん！」

我にかえった。最近、妙な事ばかり考えてしまう自分に恐くなることがある。

気をとりなおして受話器をとる。

「はい。夏岡です」

#8

「はい。夏岡です。もしもし……」

無言電話なのか。

電話の向こう側は、驚くほど静まり返っている。電話器の故障なのか。暫く待っても、何も聞こえてこないので受話器を置いた。

帰宅の途中、電車で揺られながら無言電話のことを考えていた。

その後、あの電話を使ったが問題なく話せたのでどうやら故障ではなさそうだ。いったい誰なのだろうか？

そんなことを考えながらウトウトしていた。

気が付くと奈良駅に着いていた。終点なので寝過ごす心配はない。

いつものように電車を降りるが、何か視線を感じる気がする。気のせいだろう、そう思いつつ駐輪場に向かう。

自転車に乗り家へと急ぐが、やはり何か妙だ。尾行されている感じがするので、振り返って

みるが誰も居ない。

暫く自転車を走らせ、また振り向いてみる。もし他人が僕のこの行動を見ていたらきつと変な目で見るに違いない。

S病院の前を通りかかった。ちょうどその時、救急車が入ってくる所だった。

横を通り抜ける時、救急車の扉が開き担架で人が運ばれていく。老人のようだ。チューブを鼻に入れられており、上半身は裸のようだ。

少しばかりの恐怖を感じつつも家路に急ごうとした時、担架の老人と目が合ったような気がした。その担架の老人の目は、濁った薄皮が一層貼つてあるような、そう鯖の目によく似ていた。

担架の老人は僕を見てどう思ったのだろうか。苦しくて苦しくて、僕のことなど見ているようで見えていないのかもしれない。

はたまた、「いずれはお前もこうなるのだよ。」と思っっているかもしれない。

僕は自転車のペダルを力強く踏み込んだ。このとき既に、無言電話と尾行のことはすっかり頭から消え去っていた。

続く